

紫雲丸遭難事故六十七周年追悼式 式辞

紫雲丸遭難者六十七周年追悼式の開催に当たり、ご遺族、同窓生、関係の皆様のご多数のご出席をいただき、全校生徒・教職員とともに、今年も追悼式を開催できることを、心からお礼申し上げます。

今から六十七年前の昭和三十年五月十一日、南海中学校の修学旅行生百十七名を乗せた旧国鉄宇高連絡船「紫雲丸」が衝突事故を起こし、濃い霧に包まれた瀬戸内海に沈みました。

先月、北海道知床半島の沖で起きた観光船の遭難事故は大変痛ましく、十四名の方が亡くなられ、十二名の方の行方がまだわからないままです。六十七年前の悲惨な紫雲丸遭難事故を彷彿させるもので、今回、改めて海難事故の恐ろしさを思い知らされました。

戦後十年、日本全体がまだ貧しかった時代に、南海中学校の生徒の多くが、四国や高知県から出るのが初めてで、百十七名の修学旅行生は、この旅行を心から楽しみにしていたことと思います。この修学旅行のために自分のわずかなお金を貯めてお小遣いにしたという方、旅行に出る前に親戚や近所にあいさつに回っていたという方、また、関西に住むきょうだいや親戚に会うのを楽しみにしていた方もいたとお聞きしました。この旅行は、当時の中学生にとって、夢や希望そのものだったと思います。

ところが、高松港を出て十六分後、突然の衝突によって濃霧の瀬戸内海に投げ出され、二十七名が亡くなられ、お一人はまだ帰ってきていません。

苦しみと無念と絶望の中で、死の恐怖と向き合った子どもたちのことを思うと、心が痛みます。また、必死の思いで自分の命を守った八十九名の方々も、九州や学校で悲報を聞いた同級生の方々も、さらにご遺族・ご関係の皆様も、その後もずっと続く恐怖や悔恨の念、そしてその苦しきは耐え難いものだったと思います。

この悲しい遭難事故が、日本が世界に誇る瀬戸大橋や、日本全国の小・中学校にプールが建設されるきっかけとなりました。瀬戸大橋や学校のプールは、南海中の二十八名を含めた百名もの未来ある尊い子どもたちの命の犠牲の上に実現したものです。

事故から六十七年の時が経ち、時代の移り変わりとともに修学旅行の意義も変わりつつありますが、かけがえのない命を守ることや、友達どうしのつながりや絆を深めることは、これからも時代を超えて大切にしていきたいと考えています。

南海中学校は、授業、命・人権、なかまを大切にする学校です。

南海中学校では、毎月十一日に近い日に生徒の手によって月例祭が開かれています。紫雲丸事故から長い年月を経っていますが、これからも事故を風化させることなく、命や人権、なかまを大切にする人を育て、その思いを受け継いでいきたいと考えています。

ここで学ぶ生徒たちが、中学校生活を満喫し、心も体も立派に成長し、地域に誇れる南海中学校にすることが、六十七年前の五月の冷たい瀬戸内海で亡くなられた二十八名の方々の何よりのご供養になると考えています。

最後になりましたが、ここに二十八柱の御霊のご冥福をお祈り申し上げますとともに、ご遺族、同窓生・関係の皆様方のご健勝とご多幸を心から祈念いたしまして、追悼の言葉といたします。

令和四年五月十一日 高知市立南海中学校 校長 廣瀬 啓二